

ヒアリング調査結果

～西東京市立小中学校 PTA・保護者の会メンバー（中学生保護者）～

- 実施日時：平成31年2月28日（木） 午後2時～3時15分
- 実施場所：田無庁舎5階 501会議室
- 実施方法：西東京市立小中学校PTA・保護者の会連絡会（P保連）メンバー（中学生の保護者）にお集まりいただき、グループヒアリング形式で実施
- 回答者：4人

子育てをされていて感じること

	良く感じる	あまり感じない
1 子どもとの生活が楽しい	4	0
2 子どもの成長が楽しみ	4	0
3 子どもの個性や意見を尊重できている	4	0
4 子育てに不安になることがある	0	4
5 自分の好きなことする時間がある	3	1
6 子育てにかかる経済的な負担を感じる	1	3
7 一人ぼっちで子育てをしている感じがする	0	4
8 子育てと仕事や家庭のことがうまく両立できている	2	(どちらともいえない2)
9 子どもを通じて地域とつながりが感じられる	3	1
10 子育てを通して自分自身が成長している	4	0

まとめ-----

- 子育てをされていて感じることには総じてポジティブな姿勢が感じられる。
- PTA・保護者の会として活動している方へのヒアリングであるため、地域とのつながりを良く感じると答えた方が多かったと考えられる。

子育ての環境や子どもとの接し方などで、小学生の頃と比べて、「難しくなった」と感じることはありますか

○子どもが中学生になると、保護者のつながりが減る

- 小学生の頃は、PTA・保護者の会の活動・イベントが保護者同士のつながりの場であったが、中学生になると、子どもの手がはなれて仕事を始める親が増える。そのため、PTA・保護者の会等の行事に参加してもらえなくなる。

○子どもと親のコミュニケーション、接し方

- 中学生になると思春期ということもあると思うが、親子のコミュニケーションが取りにくく感じる。

- 中学生の息子から「学校参観に来るな。」と言われてたりする。親としては学校参観に行きたいが、子どもは「友だちに親を見られるのがいや」と思うようである。特に男の子の方が、友だちに親を見せたくないと思うようである。
- 上記の理由からか、学校参観に来る親も少ない。自分ひとりだったこともあった。
- 同級生の親に「なぜ学校参観に行かないのか。」とたずねると、「子どもにしかられるから」と答える親が多かった。高校生になるとまた変わるようだが、中学生の時期が一番難しい時期だと思う。

○最近の中学生やその周辺

- 中学生になると、自主性や自分のやりたいこと、意見が出てくる。進学する高校選びでも同様に感じるが、親の方が熱心に高校を探していたという例も多く見られた。
- 子どもが「(〇〇について) どうしたら良い？」と聞いてきた時、自分でよく考えなさいという意味を込めて「自分で決めなさい。」と言う。ただし「でもお母さんはこう思うよ。」と伝えてあげている。
- 自分の子は、学校選びをどうしたら良いかわからない状態だった。中学3年生の夏休み前に「進路どうするの？」と聞いてみたら、「え、高校って行かなきゃいけないの？」から始まったくらいだった。
- 先生にもよるが、上の子の受験のときに比べて、熱心に進学先をすすめてくるというより、子どもに行きたい進路をたずねる方法に変わってきているように思う。
- 子どもが、成績が落ちたとき、その理由を友だちと先生に聞きに行ったと話していた。昔に比べて、そういうことも聞きやすい環境になったと感じる。また、放課後に勉強を教えてもらえたことなど、中学校に感謝することもある。
- 上の子(現在、高校生)の頃よりも学校も子どもも落ち着いてきているような気がする。全体にまじめになってきたと感じる。学校参観の際、静かすぎて大丈夫かな。と思ったくらい。
- 下の子(小学生)の学校参観の際、静かすぎる小学生のクラスで驚いたことがある。授業中も整然としているが、子どもってこんなに静かなのかな。とおとなしすぎて不思議な感じがした。
- 中学生になると学校の手紙を家に持って帰らない、PTA・保護者の会の会合でも、「そんな手紙知らない」と言う親が結構いる。小学校と異なり、学校で渡されるものが親に確実に届くということは少なくなる。

○中学生の子どもを持つ親として

- 仕事から帰ってきて、夜7時になっても子どもが帰ってこないということがあある。どこにいたか聞いてみると、「友だちと公民館に居た」とのことだった。そういった公民館や子ども食堂など、第三者のおとながいて、いつでも来ていいよ、というところがあるといいなと思った。
- スマホの使い方について、子どもがいつまでも見ていて困っているという話をわりと聞く。
- 身体の変化のことや性の話を日常的に家庭で話せる環境にしておくことが、大事と学校の講座(保護者対象。助産師が講師だった。)で聞いた。
- 中学生になった子どもは、自分でできることが増え、交友関係や行動範囲も広くなり、目が届かないところが多くなる。頼もしいと思う反面、そこが不安でもある。
- 自分は地域に知り合いが多いので、子どもがどこで何をしているか、周りが教えてくれ

る。そのため、子どもには「何か悪いことをしたら、自分から言いなさい。じゃないと、周りから聞くことになって、それを信じることになるよ。どっちが良い？」と言っている。

- 子ども同士でのなぐり合いのけんかのようなものは、最近ないと感じる。子どもが友だちとふざけ合っていて、前歯を床にぶつけさせられてしまったとき、相手の親からお詫びの電話があった。子どものことだし、べつに気にしないでいいですよ、と答えたが、最近、「気にしないでいいですよ」となるようなことは、ほとんどなくなっていると思う。

○中学生の子育てで、「難しい」「困った」と感じた時の相談

- ママさん友だちや先輩ママさんに相談する。
- 子どもの友だちのお母さんから「お子さんの様子はどう？」と電話をもらった。聞けば自分の子が多少いじめのような目にあっているようだ、子どもの友だちがその親に話し、心配して様子を聞いてきたという流れ。それを受けて学校の先生に相談して対応してもらったことがある。そのとき、子どもは「自分で親に伝えてみる。」と先生に言っていたようだが、隠してしまい、まったく言ってこなかった。
- 学校でのことは学校の先生に相談する。友だちのお母さんに相談すると、人によって考え方が異なり、あまりにいろいろな意見が出てくるため、かえって迷ってしまう。
- 子どもが中学時代、家出を繰り返していたことがあった。また、学校に行きたくないと言い出して、その学期の間は不登校であった。学校に行かないこと自体は、構わないと思っていたが、学校の先生にも、誰にも相談できなかった。
- 同じ相談をしても、先生によって対応が異なると思う。子どもが、ほかの子をいじめてしまったとき、その子に謝る機会を学校が作った。親も同伴で子どもが謝るということだったが、相手の親は子どもをつれて来ることができなかったということだった。先生も想定外だということで、子どもは相手の親に対して謝るという形になってしまった。当事者の子どもたちにとって、どうなのかと思った。

児童館・児童センターを利用しているか？ どんな居場所があるとよいか？

- 小学生の頃は使っていたが、中学生になってからは行ってない。
- 武蔵野プレイスのようなところがあれば行くと思う。中学生の子どもは、よく遊びに行っている。
- 自由におしゃべりや勉強ができるところがあるとよい。
- 子どもが、学校に行きたがらなかった時期でも、東伏見コミュニティセンターにはよく通っていた。楽しかったのだと思う。

見聞きすることの多い「不登校」の子ども

- 様々な相談窓口はあると思うが、不登校で悩んでいる親の相談先があるといい。
- 自分の子どもも不登校の時期があった。いつのまにか行くようになったが、そうならない子どもや親もいると思う。不登校の子どもを持つ親は追いつめられている状態だろう。もう少し優しくできないかなと思うことはある。
- どこにも相談できないでいる親が、結構いるのだろうと思う。
- 不登校について相談した先生によって、考え方や言うことが異なるということがあり、親としてはどうしたらよいか、困ってしまうこともあるようだ。
- 母親と父親でも考え方が違うように思う。母親が、子どもが学校に行かないことを父親

(夫)に相談すると、相談したはずが責められるということがある。

昨今の中学生を取り巻く環境など

- 今は、子どもに一声かけるだけでも不審者と言われる時代。他人の子どもとの関わりも難しい。
- ほかの地域のことで聞いた話だが、緑のおばさん・おじさんのあいさつに子どもが返事をしないということがある。「知らない人と話をしてはいけない。」が原則になっているからだという。安全を重視するのはよいが、地域の中のゆとりやお付き合いをやりにくくしているように思う。
- 昨今は、親が学校の委員などもやりたがらない、役割を避ける傾向を感じる。若いお母さんなどは委員につくことを頑なに拒む。今のお母さんから見るとPTA・保護者の会のイメージが悪いのだろうか。役員や学校の仕事への拒否反応がすごい。すぐ、「それ、強制じゃないですよね」という言葉が返ってくる。
- 学校の先生にも親が言いたいことを言にくいという話を聞く。内申に響くから、という理由らしいが、実際はそんなことはない。言いたいことを我慢して、親に不満がたまっているように感じる。
- 先生は先生で、親に何か言うと教育委員会へ即クレームが行く、とおそれているようなところがあると思う。
- 保護者、先生、地域の人、互いにかんじがらめできすぎずした雰囲気なのではないか。それらの潤滑油がPTA・保護者の会のはずなのに、そもそもそれをいやがる風潮があるのではないか。

まとめ-----

- 青年期（前期）の子どもを持つ親ならではの意見が多くみられた。子どもが親から離れていく時期、自由な行動を始める時期、好きなところに行くようになる時期、ということから、目が届きにくくなる子どもの環境や目の届かないところにいる時間の子どもについて、頼もしく感じつつも、不安な気持ちを持つことがあるように思われる。
- そういった保護者の不安感は、親の代わりに第三者のおとなが見ていてくれる、安心できる居場所があることでなくなるだろうという意見があった。
- 中学生の親、という視点だけではなく、PTA・保護者の会に関わっている立場からの意見も多い。
- 保護者、学校の先生、地域の人々の間に、ゆるやかなつながりのようなものがなくなり、互いの関係に一線を引くようなドライ（ある意味冷たい）な風潮を感じていると思われる。
- 「いじめ」や「不登校」というキーワードが、自分の子どもだけでなく、周囲で見聞きする事例としてよく現れていた。当事者の親の不安な様子、周囲のとまどう様子などについて発言されていた。そうした状況にある保護者の悩みをすくい上げることについて、地域社会で決定的な解決策がなかなか見い出せないこと、人々の価値観の多様性は認めつつも、そこから起こる「疎遠な感じ」へのもどかしさを感じている様子がうかがえた。